

官立宮城師範学校・校長大槻文彦にみる 社会転換期のソーシャル・キャピタル

* 本図 愛実

Social capital in a time of social transition draw out by Otsuki Fumihiko,
principal of the Miyagi National Normal School

HONZU Manami

要 旨

いま我々は、社会転換期の中にあると言える。立国という社会的危機に接していた150年前、教員養成を行う初の国の機関として、官立師範学校が、1872（明治5）年東京に、翌1873（明治6）年、大阪と仙台に設置された。仙台におかれた官立宮城師範学校の校長に任ぜられたのが大槻文彦であった。大槻は近代的国語辞書『言海』を独力で17年かけ編纂した。

本研究では、ソーシャル・キャピタルの視点を用いることにより、一世紀半前と今の人間のつながりの異同をより鮮明にできると考え、大槻をめぐるソーシャル・キャピタルの分析から社会転換を乗り越えるための示唆を得たいと考える。

大槻の仕事は、戊辰戦争「敗者」からの離脱を背景とするナショナリズムを背景に、地誌・地図の作成、辞書の作成、学校設立の三点が特徴的であると言え、それらは国として成り立っていくための道具の提供であったとみることができる。

ソーシャル・キャピタル研究の泰斗であるパットナムによる定義について認知的側面と構造的側面が含まれるものとしてみると、大槻の仕事は、仙台藩、家学と学問思想、国語学、教育活動の四つのネットワークとともに発展し、互酬性、外部性、信頼性を有したと理解することができる。

Key words：戊辰戦争，大槻盤溪，福澤諭吉，富田鉄之助，宮城県尋常中学校

はじめに

いま我々は、社会転換期の中にあると言える。従来の制度や構造では立ち行かなくなっていることが随所で発生している。国際的には、紛争や分断、新型感染症、気候変動、AI対応、国内では、少子高齢化、地域社会縮減、見えない子どもの貧困や格差などがある。新時代にむけて、従来の構造や制度にとらわれない対

応も視野に、多元的でもある危機を乗り越えていかねばならない。

その際、従来の社会構造の部分をなしてきた教員制度はどうあればいいのだろうか。この解を得るにあたり、教員集団はこれまでどのように社会的危機や課題に対応してきたのか、集団がおかれていた制度構造を踏まえた理解が必要である。150年という近代学校教育制度の形成・展開においては様々な社会的危機が

* 宮城教育大学教職大学院

あったが、最初の危機は、近代国家としての立国そのものであったと見る事が可能である。今日の危機の複雑さからすると、この危機の超克をみることは、単なる歴史的回顧ではなく、原初状態では何が必要なのか、示唆に富む。

立国という社会転換期、300年続いた江戸時代からの価値や仕組からの移行は容易ではなく、戊辰戦争などの惨事を伴った。こうした中であって、教員養成を行う国の機関として、官立師範学校が、1872（明治5）年東京に、翌1873（明治6）年、大阪と仙台に設置された。各師範学校には附属学校が付置された。仙台におかれた官立宮城師範学校の初代校長に任ぜられたのが大槻文彦であった。

本稿では、大槻をめぐる、価値とつながりについて、ソーシャル・キャピタル（以下SC）の視点から記述を試みる。SC研究の泰斗であるローバート・パットナムによれば、SCとは「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」である。パットナムはまた、『『外部性』を有し、コミュニティに広く影響する」、「私財であり公共財」との定義も付している（パットナム2019, pp.14-16, Putnam, R.D., 2000, pp.19-20）。こうした捉えは抽象性が高いとも言え、政治学、経済学、社会学などでSCを用いることを可能にしている。つまり、SCは学際的な分析ツールともなっている。近年ではまた、OECDが未来のためのウェルビーイングの四資本の一つとしてSCを位置づけ重要視している。人と人のつながりを財とするSCは、少子高齢化による資源縮小などの課題を抱える我が国においても重要な資本であると言える。こうした特徴をもつSCを分析の視点とすることは、一世紀半前と今の人間のつながりの異同をより鮮明にし、社会転換を乗り越えるために有益な情報を浮かび上がらせる。

以上の問題関心を背景として、まずは大槻とはどのような業績を残した人物なのかを確認しつつ、大槻の活動に体现されている価値や学校観を踏まえ、大槻を取り巻くSCについて検討し、立国という社会転換期のSCの一端に迫る。

1 大槻に関する社会的認知・記録・先行研究

大槻文彦は、1847年に生まれ、1928（昭和3）年

2月、82歳で没した¹。日本初の近代的国語辞書『言海』を17年かけ独力で完成させた。1875（明治8）年から編纂が始まり、初版が世に出たのは1891（明治24）年であった²。大槻の辞書編纂は今日においても高く評価され、国語学の研究対象として先行研究も存在してきた。2000年には、『言海縮刷』版と同サイズである厚さ5センチはある文庫が復刻版として出版され、現代の我々も手軽に手にすることができる³。『言海』の巻末には、7頁にも及ぶ「ことばのうみのおくがき」が記され、刊行までの労苦が記載されている。この奥書を基にした、高田宏による小説『言葉の海へ』（1978）は、1978年大佛次郎賞にもなった。ただし、『言海』の文体は150年前に用いられていた漢語調の漢字かな交じり文であり、今日では使用されていない旧字や合字も含まれ、解説が必要ではある。大槻の肖像は、2000年に『大言海』作成者として「20世紀デザイン切手」ともなっているが、令和の今日、大槻に対する認知度は、一族の出身地である一関市と、校長であった宮城県尋常中学校（宮城県仙台第一高等学校の前身）ならびに8代館長であった宮城県図書館の関係者を除いては、一部の研究者の間に留まっている感がある。

『言海』とはどのような辞書であったのか。『言海』の冒頭に大槻は、「本書編纂の大意」として、次のような点を示している⁴。要約すると、①本書は、日本普通語の辞書である、普通辞書の体例は、その国の普通の単語もしくは熟語であり、固有名や学術専門の語は納めておらず、字母または形態の順序、種類により順に掲載する、②辞書の語には「発音、語別、語源、語釈、出典」の五種の解が示されねばならない、③辞書は文法を基に作られるべきである、④古くよりある言葉が雅言で後世出来た言葉が俗言と思われやすいが、雅俗は時代とともに変化し、使われない死言、俗であっても日常よく使われる活言がある。本書は、古今の衆語を網羅し、雅俗死活の別をこのような意味で付した、⑤本書は、ウェブスター氏の英語辞書の中の「オクタボ」と言われる節略体のものに倣っている。英語辞書にも掲載されている語はそれを訳して掲載しているが、それらの出典は略す。和漢洋の典籍は約八百余部、三千余巻、自らの見聞、暗記、推考もあるが、それらの出所も除している、⑥明治8年2月に命を受けて起草を始め、明治17年12月に成稿した。まずは、

古今雅俗の普通語4万語余りを仮名の順序により分類した。それらの語別、語釈、語源を書き、多岐に渡る出典にあたることは予想を超える時間となり、新たに文法の考定を起さねばならないと考え、さらなる全体校訂に十年がかかった。公務や他の他書編集もあり、浅学寡聞につき誤脱のないものとなつてはおらず、今後の重修に期したい、となる。

大槻は、英文法を参考に、日本語に文法があることを初めて整理し、それらの語句を辞書として体系的に記述し、しかも庶民にも購入できる版も作成するという大衆化を図つたのであった⁵。

大槻の仕事は『言海』編纂だけにとどまらない。その全体を捉えるにあたり、記録や主な先行研究に触れておきたい。

記録としては、嗣子の大槻茂雄が大槻の著作等を編集した『復軒旅日記』に再録されている「自伝」(pp.218-238)と「年譜」がある(大槻茂雄校訂1938)(以下「自伝」の引用は同書掲載版から)。「自伝」は、東京日々新聞の記者の質問に答え、1909(明治42)年10月7日～10月15日まで数回にわたり同紙に掲載されたものの転載である。「年譜」は、この出版より10年早い1928(昭和3)年の『国語と国文学』昭和3年7月号に掲載されたものと変わらない。この号では、大槻の死を悼み特集が組まれた。上記「自伝」も再録され(pp.912-926)、その際に笥五百里(かけい いおり)が、当家や関係者より資料収集し聞き取りを行い、「年譜」(pp.897-912)を作成したとされている(東京帝国大学国文学研究室1928,pp.952-956)。

近年では、山田俊雄が、茂雄の子である大槻清彦氏の協力を得て、上記「年譜」の基になる、茂雄が追記した記録等を「年譜」として『図録 日本辞書言海』に収録した(山田1980,pp.11-44)。「復軒旅日記」の「年譜」にはなかった、大槻自身が日々書き留めていた微細な内容が追記されている(以下「年譜」の引用は『図録 日本辞書言海』に収録されたものから)。

大槻一族についてのまとまった研究としては、大槻家の一次資料を保管する、一関市博物館による記録や論考がある⁶。言語学者の後藤齊も大槻研究の成果や主要参考文献一覧等や年譜をホームページ上に公開しており、初学者には手引きとなる。郷土の教育者という視点においては宇野量介『明治初年の宮城教育』(1973)、近年まとめられた体系的な記述という点

では安田敏朗『大槻文彦『言海』辞書と日本の近代』(2018)がある。

2 大槻のナショナリズムと仕事・学校観

(1) 大槻のナショナリズム

これらの先行研究を基として大槻の仕事について、SCを構成する価値やネットワークという点を観点とすると、図1のような概念図により理解することが可能である。

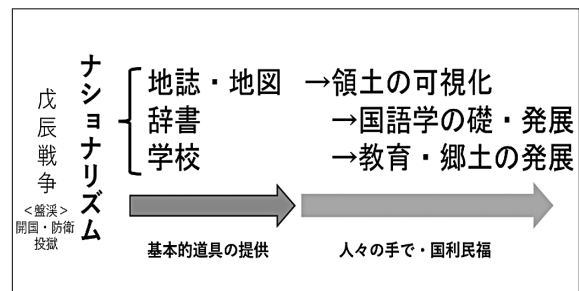


図1 社会転換期における大槻文彦の仕事

まずは大槻の仕事の土台となっているナショナリズムについてみておきたい。先行研究の多くが言及しているように、大槻の著作や活動としての、地誌・地図や辞書作成においては日本国の形成が強く意識されている(田中恵1999,2001,安田2018)。これらに加え、学校や教育活動がある。すなわち、大槻の仕事においては、地誌・地図の作成、辞書の作成、学校・教育活動の三点が特徴的であり、それらは国として成り立っていくための基本的道具の提供であったとみることができる。

日本国の形成への意識は、仙台藩の学術、医術など同藩の知の形成に携わってきた家系と教え(家学)、さらには戊辰戦争後の父の入獄が強く影響している。大槻は、漢学者盤溪(ばんけい,1801-1878)を父とし、蘭学者玄沢(1757-1827)を祖父とする⁷。兄に如電(によでん,1845-1931)がいる。玄沢は、杉田玄白と前野良沢に師事し、医学と蘭学を学び、二人の名をとって玄沢と称した。盤溪の兄玄棟は玄沢の医学・蘭学を継ぎ、盤溪は漢学に進み名をはせた。盤溪の仙台藩士としての任務は江戸詰めが主であり、大槻も生まれは江戸であった。盤溪が仙台に呼び戻された際に同行し、17歳の時仙台藩の藩校養賢堂で学んだ。盤溪は、養賢堂学頭であった大槻習斎の死後、後任となつ

た。習斎の曾祖父の清慶と盤溪の曾祖父の玄梁は兄弟であり、大槻家は仙台藩支藩であった一関藩の西磐井郡を代々治める家柄であり、その中で大槻平泉とその子習斎が長く養賢堂の学頭を務めていた（一関市博物館2011, pp.8-10、宇野1973, pp.185-226、大島英介2005, pp.16-17）。

盤溪は、父玄沢の西洋医学との関わりや自身の見聞から、戊辰戦争の中の仙台藩において、持論である開国と西洋列強国からの防衛を踏まえ、藩主慶邦の命の下、朝廷に事実調査や話し合いを願う意見書を書くなどした。戊辰戦争降伏後、家老2名が責をとって死罪となったが、戦後藩内主流となった者たちにより新たに7名が処刑となった。戊辰戦争時、藩の命を受け江戸や京都で密偵や武器調達を行った如電と大槻も罪人とされたが、かろうじて召捕を逃れ京都や東京に出て、大槻は再び横浜で英語を学ぶ生活をしていた。しかし、親戚預かりの謹慎となっていた高齢の盤溪が入牢（その後処刑対象者であることがわかる）との知らせにすぐさま仙台に戻り、身代わりを申し出た。盤溪門下一同による助命嘆願など大槻らの様々な働きかけにより盤溪は病気を理由に釈放され蟄居となった（一関市博物館2011, pp.8-10、宇野1973, pp.185-226）。

ここより、大槻の戊辰戦争「敗者」からの転脱が始まる。それは、皇国としての新しい秩序や権威を是として仕事をするということであり、そのなかで尊皇の下に仙台藩忠臣であった一族の正統性が持ち出され、藩の知を担った出自と新しい世における正統性が連環的に示されていった。この点は、同じく「敗者」である兄如電と交差する点からみると、より一層はつきりと捉えることができる。

その一つには文部省という国の組織との関わりがある。如電も大槻も文部省に入省した。如電は1872（明治5）年7月、大槻は同年10月に出仕（26歳）となった。如電は3年で文部省を辞し、大槻は、1891（明治24年）10月（45歳）まで籍を置いた（非常勤満期、「年譜」）。

山口昌男の『「敗者」の精神史』には、戊辰戦争に関わる「敗者」として、如電が登場する（山口昌男1995, pp.173-174）。山口は、工藤宣『江戸人のスクラップ』を引用し、如電は、父が「謹仕中不届」として何の罪かもわからぬまま罪人とされ処刑されようとしていたことについて憤慨したとし、「1889年の国

事犯特赦の決定を受けて『罪名消滅証明御願』を大審院に提出、一年後、証明書を得」、それは父の死後12年もたつてのことであり、尊敬する父の罪を晴らそうとする子の執念として贅辞している。山口は、如電について「藩閥政府の仕打ちを忘れることができず」、文部省出仕を三年でやめ、権力に与することを嫌い、1931年に没するまでの五十数年、在野にて和漢洋に通じる、一風変わった碩学者として、世に存在感を放っていたとする。

「自伝」のなかで大槻もまた、父の入獄を「私の一生の大難事」（p222）と述べているが、大槻の文部省仕えは如電とかなり異なっていた。20代後半から30代、官立宮城師範学校校長をはじめ、文部省職員として英和辞典の翻訳、教科書作成を行った。1886（明治19）年（40歳）には第一高等中学校教諭となっており、官僚としての主流からは外れたものと思われる。1888（明治21）年9月に第一高等中学校教諭と漢文学主任嘱託解職（＝免職）となっている（「年譜」）。

如電との交差に関する記録としては、後述する『言海』出版祝宴に、大槻とともに兄如電も招待者となっていることがある。大槻の辞書編纂とは、大槻一家の業績とみなされていたと理解できる。

「自伝」には1899（明治32）年に文学博士の学位が授与されたとき、父の墓前で兄と泣きながら報告したという述懐もある（p228）。

晩年、大槻は、『言海』の増補版に取り組んでいたが、さ行まで成稿したところで没した。その後の修正作業を新村出に依頼し、大槻の名を冠し『大言海』（全4巻）を世に出したのは如電であった（『大言海』1935、後記）。嗣子茂雄は如電の次男であり、東京帝国大学農学部教授の職にあり、大槻の著作を整理し『復軒旅日記』をまとめた。

兄如電は肉親としての兄である以上に、大槻一家を「敗者」から引き離す同志であった。

一家の正統性と新しい世における正統性との連環を象徴することに、『言海』奥書に、大槻が、17年をかけて『言海』を完成させることができたのは、祖父の戒めである「遂げずばやまじの精神」を常に服膺（＝心に抱く）してきたからだ、と記したことがある。奥書は、祖父の誠語である「およそ、事業はみだりに興すことあるべからず、思ひさだめて興すことあらば、遂げずばやまじ、の精神なかるべからず」⁸から始ま

る。思ひさだめて(=準備を重ねて)、国語成立のための辞書編纂という大事業を成し遂げることは、明治初期の社会において正統につながる規範的行動である。

当時の権威者たちが、大槻の辞書完成を祝したことも大槻一家の仕事に正統性を付与するメルクマークとなった。

同郷で日本銀行総裁を務めた富田鉄之助(後に東京府知事等、1835-1916)と、「かなのくわい」で活動をとともにしていた高崎正風(宮中顧問官、後に枢密院顧問1836-1912)が発起人総代となり、1891(明治24)年6月、『言海』の出版祝賀会が盛大に催された。伊藤博文(枢密院議長)、山田顕義(前司法大臣)、勝海舟(枢密顧問官)、大木喬任(文部大臣)、榎本武揚(外務大臣)、加藤弘之(帝国大学総長)、菊池大麓(理科大学長、後に文部大臣、箕作秋坪の子)、外山正一(文科大学長・当日は欠席)、辻新次(文部次官)、陸羯南(くが かつなん、日本新聞社長)、関直彦(東京日々新聞社長)、高田早苗(読売新聞社主筆)、伊達宗敦(旧仙台藩主別家)、船越守(宮城県知事)、松平正直(熊本県知事)など、30数名が招かれた。

福澤諭吉も招待客であったが、伊藤の次席となる次第をみて出席を辞退した。しかし、福澤を含む伊藤らの祝辞は『言海』の広告にも使用された(山田1980巻末資料・現物再録、一関市博物館p36・画像再録)。伊藤との接点は祝宴だけに終わらず、「自伝」では、『言海』の宮中献上に対して、通常の受領連絡とは異なり、「右は軌道に裨益(ひえき) 不少善良の辞書にして精励編集の段 御満足に被 思召候云々」との返答をもらい、「伊藤公が後進の奨励になりませうからと云われて加へられたことと漏れ承ったことがあります」(p234)と、深い感謝の意が述べられている。

(2) 地誌・地図の作成

四万語の「普通語」を採取し、一からその意味を付し、それだけでなく独力で語源を示すということは、驚異的な知識量と熱意があつてのことになる。しかし、その前に、大槻がやっておかねばならないと思ったのが、すなわち、「思ひさだめて」の一つが、地誌・地図で領土が示され、それらが社会的認識となることであった。そのための仕事として以下のようなものがある。①「北海道風土記」成稿(明治2年23歳)、②「琉球新誌」刊行(明治6年、27歳)、③「琉球諸島全図」刊行(②と同年)、④「日本暗射全図」刊行(明治7年、

28歳)、⑤「万国史略」刊行(明治8年、29歳)、⑥「小笠原諸島新誌」刊行(明治9年、30歳)、⑦「竹島松島の記事」(「洋々社談」45, 明治11年、32歳)、⑧「日本小史」刊行(明治15年、35歳)。つまり、北海道、琉球、小笠原、竹島と全方位となる日本の領土についての著作ということになる。20代から30代にかけての仕事になる。

「自伝」では、①について、「ロシアが蝦夷地に垂涎しているという事は子供の時分から聞かせられ、祖父盤水なども、これを憂えて北辺探事などという著書があつて、家に伝わっている。それが今度北海道となつて開拓される事となつて大いに喜んだが、まだまだ油断ならないと思つて、この年諸書を集めて北海道風土記30巻を編集した」「出版はしない。固より23歳の著作であるから極めて粗雑なものだが、私の著作の初であつて、明治7年に樺太の建議とともに左院(筆者註:明治初期の立法院)へ一部献上した」(p229)と述べている。

これらの仕事について、田中恵(1999)は、人々の「曖昧な三次元の生活空間をいったん明確な二次元の『国』という領域把握に変換させることであり、その区切りとしての国境線を明示すること」とし、「抽象概念としてしか存在しない『国』を可視化させ、実体化させる。あくまで具体的な記述と精緻な地図によって抽象である国を人々の脳裏に映し出すというのが一連の四著作(筆者註:上記①②⑥⑦)のもった意味なのである」とする。「自伝」には、④が全国の小学校でも広く使用されたとある(p230)。認識上の可視化の上に、教育を通して領土認識の内面化が行われることも意図されたと理解することができる。

(3) 大槻の学校観

大槻は多数の著作を残し、教育学についての著作翻訳・校閲にも関わっているが⁹、近代学校教育制度に言及した著作はない。しかし、残された資料から様々な視点が見えてくる。

東京日々新聞記者に話した「自伝」は、「学界の偉人」というタイトルの連載記事であった。自身の教育の経歴は言及されているが、学校や教育に関する大槻の考えは直接的には述べられていない。そうした文脈のなかで、「自伝」の終盤では、「有用とすることを間違ひのないように、出来るだけ完全に十数年かけて作る」とした上で、「さて以上の著述で私の学問がい

かにも雑駁であると思われよう。(中略) かような雑学になったのは辞書などを作ったからであろうが、私の生れ時がわるくて、今の文明の教育を施されるようになった頃には成長しすぎてその教育を受けられなかったのもそれである。専門の学をしなかったのもそれである。専門の学をしなかったのは一生の損であった。何学問でも専門でなければ造詣せぬ。自分の失敗を証拠として青年諸君に忠告する」と述べている(pp.237-238)。

大槻がこれを述べた1909(明治42)年は義務教育段階から高等教育に連なる学校教育制度も定着をみていた。次表のように、大槻は、子ども期から青年期にかけ、江戸時代教育機関、私塾や個人を通し、英学などを積極的に学び、文部省入省に至っている。こうした私的な学びの仕組みに比べ、当時の学校教育制度、とりわけ高等教育が優れているという認識を示す発言として理解できる。『言海』出版祝宴に、帝国大学等の学長3名を招くことも高等教育制度への信頼の表れと言えるだろう。

表1 大槻文彦の教育歴(文部省入省に至るまで)

		学びについて	教える側・就職等(カッコ内も「年譜」から)
1851	5歳	家学(漢学及詩文)を受く	
1861	15歳	1月7日、林大学頭(門)に入る	
1862	16歳	江戸開成所に入り英学・数学を修む	
1863	17歳	養賢堂に入り文武修行す	9月2日養賢堂主立(=助教)を命ぜられる
1866	20歳	5月15日、洋学稽古人を命ぜられ英学を修む。10月27日江戸開成所に入り英学・数学を修む。12月18日、横浜に移りバラ氏に就き英学を修む	
1867	21歳	10月タムソン氏に就き英学を修む	
1868	22歳	4月16日横浜にて洋学修行を命ぜられる	(1月3日伏見鳥羽の戦に会す)(9月仙台藩降伏し、10月藩論一変して召捕られんとす。横浜に逃る)
1869	23歳		(4月盤深入牢、5月上旬仙台に戻り父の助命嘆願を行う)
1870	24歳	5月2日東京大学南校に入り英学・数学を修む	(元旦父出牢)
1871	25歳	筑波秋坪氏の英学私塾(三又学舎)に入る	9月塾長になる
1872	26歳		10月3日文部省八等出仕となり、英和対訳辞書の編纂を命ぜられる

出典：「年譜」から転載・一部筆者が現代的表現に変更

皇国の下での正統性追求と体制堅持の姿勢は、師範学校校長就任に際しても現れている。1873(明治6)年、盤溪は師範学校校長として旅経つ大槻に以下のような漢詩を送った(「年譜」,宇野1973,pp.84-85)。「児文彦 拝師範学校校長之命 将赴任於宮城県言此勉之 老蘇発憤日 諸葛出盧時 汝今拜朝命 居然為人師 設為五萬三千蠻 欲化尋常億兆民 勝任興否且休説 播揚皇風在此辰」(我が息子は、多数の民を変える、全国に53000校設置された学校の教師を育てるとい

う、天皇の命による、重要な任務に旅立としている) 大槻も返歌し、

「奉命建師範学校於仙台 大槻文彦

文明到所有輝光 聖王威風被八方 五萬三千開小学 東西南北設周庠 人唯拔俊農商士 学独取精皇漢洋 幸是微臣遭盛際 奥東教化破天荒」その意は、53000校の小学校設置は、天皇の威風を表すものであり、人については農民商人士族から俊才を選び、学びにおいては国学漢学洋学から優れたものを取りだし、微力ながらの臣として東北の教化を最大とするように力を発揮します、となる。

ここで注目すべきは、短い詩の中で、53000校の尋常小学校が全国に普及することになるという新たな制度の意義が、盤溪の言葉に依拠して再度強調されていること、人の育て方と何を学ぶか、教育の方法と内容という教育活動の重要要素が二つの方針として示されていること、「農商士」という順で俊才を育てる対象が示されていること、である。大槻も学んだ藩校養賢堂がそうであるように藩校など当時の質の高い教育に学ぶことができるのは、武士の家の男子だけであった。明治になっても、士族の子どもは木刀を指して学校に通い、農商の家庭の子どもを下にみる態度をとった、という記録もある(宮城県教育委員会1976,p794)。学制以前は商人の家庭はもとより、農家の子どもは学問習得には縁遠かった。

俊才を育てるという思想は、師範学校・附属学校の開校の際に示された漢詩にもあり、当時月2回の発刊であった「東北新聞」にも掲載された。宇野(1973,p85,p220)の訳によれば、「君見ずや、開物成務何に由って得るや 一片の精神 学と識による ただ人智をひらいて俊才を産まん 富国の基なんぞ極みあらんや」である。

師範学校校長出向は2年で終わり、1875(明治8)年東京に戻った大槻は、辞書編纂の仕事始めていく。

次に郷里の教育に深く関わるのは、1892(明治25)年4月からの宮城県尋常中学校校長としてである。校長在任は3年余りで1895(明治28)年9月に依願辞職したが¹⁰、大槻は倫理の授業を受け持っており、この時学んだ生徒たちからの思慕の念は強い。

その一人に吉野作造がいる(宇野1989,阿曾沼2005,pp.83-84,pp.96-97)。大正の初めから年2回、大槻を囲み、同窓の会「壬辰旧雨会」がもたれた。吉

野が会の代表で、1924（大正13）年に77歳の喜寿を祝って木彫りの胸像が贈られた¹¹。胸像の木箱には、吉野が「此の催を先生は大いに喜ばれ、ご病気ででもない限り万障を差繰って出席され、大いに若返って談論され、殆ど帰るのを忘れられる程であった。（中略）先生は時々言海と旧雨会の諸君とは、己の二大事績だと云われた」と書いた。嗣子茂雄に贈答の由来を書くよう依頼されたとされる（宇野1989,pp.153-154）。

その茂雄は、「自伝」は大槻が63歳のときのもので、明治45年66歳の時に出版社から言海の増補版の話があり、以後82歳で没するまでの20年間、「増補言海の編集のみに没頭して、他のことは全て関係を絶っていた」、起きている正味13時間、筆を離さず、「家族のものにすら時間が惜しいと云ってくつろいで話などしない。（中略）私なども・家族のすべてがそうですが・父と対座して話したと云ったら、増補言海の編集が始まってこのかた一度もない位であります」と述べている（大槻茂雄1928）。吉野らの会に喜々として参加した大槻の姿とはまるで異なる。

教え子の活躍を喜び、後進に期待する姿は、1922（大正11）年の宮城県仙台第一中学校創立30周年記念式典の講演「学術上の注意」にも表れている¹²。この時大槻は76歳である。講演の終わりでは、「一生の間、何事をするにも、誠意、正直を守るべき事、是が、道德の大本なる事は、申すまでもないが、（中略）「あの男は、たしかだ」、「あの男は、何を任せても大丈夫だ」と、衆人に、認められる、この信用というものが、身を世の中に立てて行く「大資本」となる。役に立って、そうして正直だ、という人は少ない。かような人になると、こちらから求めずとも、先方からさがってきます。生活難、就職難などと云うことは、ありませんぬ。も一つ、何事をするにも、一身の立つためと云うことは勿論であるが、又、併せて、世のため、国のため、国利民福と云うことを目的とせねばなりません」と述べている（阿曾沼2005,pp.90-95・大槻の講演再録）。胸像贈呈は、この講演の翌年であった。在学生や卒業生たちは、大槻が、自分たちを認め激励してくれることに感じ入ったであろう。

この「国利民福」は、講演の結語にもなっている。講演は、「さて、其後は仙台を離れて、居るようになりまして、誠に、仙台に対し、父祖に対して、相済まぬと事と思っております。もし増改言海が出来ました

ら、いささか諸教員の参考の片端にもなろう。そうなれば、間接的教育になるかと思います。なお注意して国利民福を期します」で終わる。専門の学の奥深さや難しさを知るからこそ、校長辞職後において、学校・教育についての自分の関わりは間接という認識であった。

残されている記録では、官立宮城師範学校ならびに宮城県尋常中学校について新設であるため校舎建設に尽力したことが記されている。加えて、育英事業にも大きな足跡を残した。旧仙台藩領の東京大学入学者の扶助を目的として、富田鉄之助と仙台造士義会を立ち上げ、富田に次いで会長を務めた（宮城県教育委員会1976,pp.903-910）。同会は20年間の時限設置で東京帝国大学等の入学者48名を卒業まで扶助する計画となっていた。1881（明治14）年12月の発足から1914（大正3）年4月解散までの間、59名が同会の毎月の貸与を受けて卒業した。官立宮城師範学校校長就任の際の詞にある、富国の基が教育にあるという見方は、会の趣意書にも見られる。それは「そもそも人材教育の国家に必須なる　ここに之をぜい言（＝無駄に述べる）するを俟たず」の一文から始まっている。

宮城県師範学校卒業生であり、宮城県蔵王町の小学校に勤務していた小野さつき訓導が、引率中に川でおぼれた子どもを救いつつ自らは溺死した件について、弔辞と弔金を送ったことも「年譜」に記載されている。

大槻の学校観とは、保守体制派として近代学校教育の意義に賛同するというものであり、教育活動の第一線から退いても、後進を支援するなど間接的な関わりを保持したと理解できる。

3 大槻をめぐるソーシャル・キャピタル

（1）SCの構造的側面と認知的側面

図1でみた大槻の仕事とは、SCの要素である、価値、ネットワークとともにある。ここで、その要素の関係について整理しておきたい。SCの一般に知られる定義は、パットナムによるものであるが、冒頭で述べたように抽象性が高く可視化しづらい。アルドリッチは、SCの測定の困難さは概念の混在にあるとし、認知的側面と構造的側面が含まれていると指摘している（アルドリッチ2015,pp.35-76）。

この指摘から、パットナムの定義を認知的側面と構造的側面に分けて考えてみると、まず、構造的な側面

とは可視的に捉えることができる形態としての社会的ネットワーク、認知的側面には、関係者の心理や認識など理念的なものである、**互酬性・外部性・信頼性**が相当すると考えることができる。**互酬性・外部性**は主体を特定することができ、可視的に捉えることも可能だが、**信頼性**は、主体が社会全体など抽象的になりやすく、測定や可視化がより難しくなる。これらは図2のように示すことができる。これらを基に大槻をめぐるSCをみてみよう。

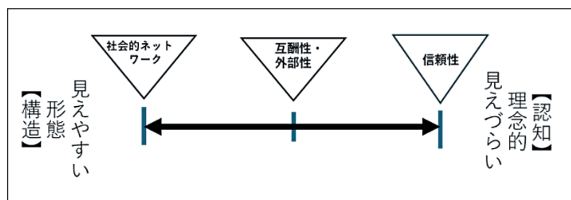


図2 SCの要素の整理

(2) 構造的側面(社会的ネットワーク)

大槻が関わる社会ネットワークには、①仙台藩・戊辰戦争「敗者」のつながり、②学者であった父祖に関わる学問思想のつながり、③国語学者としての大槻に関わるつながり、④教育活動に関わるつながり、の四点があり、それらはそれぞれ重なりあっている。

①は、これまでみたように大槻の思想を形成してきた母体であり、廃藩置県後も、旧仙台藩関係者との交流や仕事は続いた。なかでも、仙台藩士であった富田鉄之助との関わりと活動が目立つ。富田は、勝海舟(1823-1899)の下で学び、仙台藩の奨学金を基に1867年にアメリカで学び、明治政府成立後も留学生としてそのままアメリカに残り経済学を学んだ(高橋秀悦2014)。岩倉使節団のアメリカ訪問により、大久保利通、伊藤博文の知遇を得て、岩倉からニューヨークに留領事心得を命じられ、その後外交官としてキャリアを積んでいった(仙台市教育会1938, pp.385-394)。1881(明治14)年帰国し、大蔵省に務め、1888(明治21)年日本銀行総裁になった。翌年辞職し、貴族院議員、東京府知事の後、日本勧業銀行、富士紡績、横浜火災海上保険会社の創立に関わった。先にみたように、『言海』出版祝宴の錚々たる出席者は、富田の人脈によるところが大きい。

富田は、門弟富田と称して、戊辰戦争の戦争責任を背負い処刑された家老・但木土佐の墓誌を書いている(高橋2014)。盤溪をはじめ但木の死を悼む元仙台藩

士の一人であった。戊辰戦争時、富田はアメリカにいたが、藩の難事を知り帰国した。しかし勝に叱責されアメリカにもどった。但木の薫陶をうけた富田もまた、大槻と同じく戊辰戦争の「敗者」であり、後進である大槻の立国に関わる活躍を支援した。富田と大槻の親交の深さは『言海』奥書にも書かれている。富田の発案と思われる仙台造士義会に大槻が尽力するのも当然のことであったと思われる。

戊辰戦争「敗者」からの復活という点では、「敗者」であった榎本武揚(1836-1908)との関わりも深い。榎本も勝の下で学び、戊辰戦争時には函館に新国家樹立を掲げて立てこもったが、新政府では通信、農商務、文部、外務大臣を歴任するまでとなった。「年譜」によれば、1892(明治)25年に大槻が宮城県尋常中学校校長として東京を離れる際の送別会の参加者の一人である。

②は、父祖の家学・福澤諭吉・明六社・明六社を立ち上げた西村茂樹・明六社解散後に西村茂樹が立ち上げた洋々社、といった学問思想グループにおけるつながりである。明六社は、森有礼が、西村茂樹に、アメリカで見られるような学術結社の必要性を訴え、1873(明治6)年、西村が「都下の名家」と目される福澤諭吉、加藤弘之、箕作秋坪(みつくりしゅうへい, 1826-1886)らに呼びかけ結成された。大槻も会のメンバーであった(戸沢1985)。大槻にとって箕作は英学の師であり、西村は辞書編纂を命じた文部省の上司である。『明六雑誌』は政府の標榜律、新聞紙条例を踏まえ1875(明治8)年に廃刊になり、会の活動も廃止となった。会の存在はわずかな期間であったが、メンバーには、勝海舟、菊池大麓、外山正一の他、辻新次(定員)、富田鉄之助(通信員)、といった『言海』出版祝宴に名を連ねる人々の名がある。

福澤は、盤溪と親交が深く、戊辰戦争の藩の始末を嘆く言葉も残している(『福翁自伝』pp.396-406)。『言海』祝宴出席は固辞したが、祝辞の公表については了解した。祝辞には「大槻盤水先生の誠語その子孫を輝かす」として「盤水先生は我洋学創業の先人として我々後学の常に敬慕するところ、また君の尊厳盤溪先生は当時の碩儒にして切に西洋の文明を悦ばれ天下その名を知らざる者なし この父祖にしてこの孫子あり」と父祖の名声につながるものとして大槻の仕事に最大級の賛辞を述べている(山田1980巻末資料・現物再録)。

洋々社は、保守思想の西村が1875（明治8）年3月に立ち上げ、同団体の機関誌第一号の序文は盤溪が書いた。明六社の多くが洋学や欧米の留学経験者であったのに対し、洋々社は漢学、国学者が多いとされる（本庄1968）。メンバーの一人に教育勅語の注釈『勅語衍義』（1891）等で著名な井上哲次郎（1856-1944）がおり、大槻は井上の『心理新説』（1882）の校訂を行っている。

③については『言海』出版前、1881（明治14）年に高崎正風らと「かなのくわい」¹³を創設している。同会は漢字を全廃して仮名分かち書きにすることを主張するもので、10年ほど続いた。漢文は日本語文法を乱し、漢文理解からでは知識の習得が遅くなるというのが大槻の主張であった。大槻は、学位取得後、1900（明治33）年国語調査員嘱託、1902（明治35）年国語調査委員会主査、1911（明治44）年臨時仮名遣い調査委員会委員、となった。1916（大正5）年に国語調査委員会編『口語法』刊行に携わり、日本語の近代化を推進するグループの重鎮となっていった。

④は、仙台造士義会による育英事業と、宮城県尋常中学校校長に関わるつながりについて、より明確に確認できる。その内容は、上述のとおりである。

（3）認知的側面（互酬性・外部性・信頼性）

関係者が大槻の仕事からどのくらいの影響をうけ、それが大槻にもどのような作用をもたらしたか、そのような互酬性を明確に可視化することは難しい。しかし、教育活動を通し、大槻を慕う吉野ら尋常中学校卒業生の様子は先にみたとおりである。官立宮城師範学校卒業生においては、木村敏（1850-1908）がいる（仙台市教育会1938,pp.379-384,宇野1973,pp90-94）。

木村は、盤溪に漢学を習い、戊辰戦争にも従軍した。その後、官立宮城師範学校の生徒募集に応募した。校長であった大槻は「偉才を認め、常に級監又は幹事を命じた」とされる（仙台市教育会1938,p379）。1874（明治7）年に卒業となり、三等訓導として東二番丁小学校勤務となった。小学校教員不足という当時の窮状について、宮城県令に小学校教員養成の建議書を提出し、それを基に1875（明治8）年小学校教員伝習学校が設置されると、同行の校長となった。1878（明治11）年に官立宮城師範学校が廃止され、仙台師範学校へと移管された後は校長代理になった。1880（明治13）年に病気で依願退職したが、1886（明治19）年

宮城県尋常中学校教諭・監事を務め、1889（明治22）年からは宮城県尋常師範学校教諭になった。宮城県の普通教育普及の功労者と讃えられている（仙台市教育会1938 pp.379-384）。

死後石碑が建てられ、碑文には生徒たちへの愛情が深く、病気の生徒を必ず見舞うなど、教え子たちからの信厚く、多数の優秀な卒業生を世に出した、と書かれている。碑文の作成者は大槻、篆額（てんがく、筆者註＝碑文の題字）である「頌徳碑」（しょうとくひ、頌＝たたえる）は、従三位伯爵伊達宗基となっている（仙台市教育会1938,p382）。

石碑は、みやぎNPO プラザの敷地内に現存している。当地は明治時代には榴岡公園の一部であった（谷謙二による今昔マップ）。碑の裏面には「明治四十四年四月年門下生一同建立 建設委員総代」として18名の名前が刻まれている。その筆頭には一力健次郎と刻印され、3名は女性名である。高さ4メートル近くの巨大な碑で、東日本大震災を耐えたことに驚きつつも、建立者たちの木村への敬慕の念がひしひしと伝わってくる。榴岡公園であった当時には、教育者としての木村への敬意と称讃が、伊達家と大槻の名とともに、人々にも顕示されたものと推測できる。

木村の弟である匡はまた、『言海』出版祝宴の発起人の一人であった。伝習所卒業の後、文部省官僚となり、森有礼に重用され、台湾総督府に勤め、晩年は宮城県町村会長として令名をはせたとされている（宮城県教育委員会1976,p621）。

官立宮城師範学校校長としての大槻の教え子には、反体制派のジャーナリスト、陸羯南もいる（宇野1973,pp.94-98）。陸も『言海』出版祝賀会の招待客であった。1875（明治8）年、陸は大槻の後任となった松林義規から退校処分を受け、その後フランス語を学ぶなどして、さらには藩閥政治と対立姿勢をとる、新聞「日本」を立ち上げた。『言海』出版につき、「民間の偉功に報酬なし」として、大槻に私費出版させた政府を批判している（山田1980巻末資料・現物再録）。

外部性や信頼性という点では、大槻が辞書を完成させ、国語学の基礎を築いたという業績とともに、教育者としても功績をもつことが、昭和初期には、仙台市長渋谷徳三郎の指示による『仙台先哲偉人録』（1938）に収録されている¹⁴。大槻は仙台の教育振興に貢献した偉人の一人であった（仙台市教育会1938,pp.437-

454)。渋谷は、官立宮城師範学校の後継となる宮城県師範学校の卒業生であり、同校関係者のネットワークに影響力をもっていた(本図愛実2023)。『明治初年の宮城教育』(1973)などにより大槻についての論考を示している宇野量介は、宮城県仙台第一高等学校校長の後、宮城県教育長であった。仙台市や宮城県の教育行政に強い影響力をもつ者たちにより、大槻の存在が流布されてきたことになる。

今日では、1998年に移転し新装された宮城県図書館において『言海』に記載されている文章が外壁の装飾として記されており、図書館月刊誌の誌名も『ことばの海』となっている。大槻の業績への信頼は、知に関わる意匠としての流通にも示されていると理解できる。

宮城県や一関市においては、道徳教材や子ども向け資料(マンガ)などが作成されてきた。それらの中で大槻は「遂げずばやまじ」に表される不撓不屈や困難の克服といった価値の体現者とされている。

宮城県教育委員会が作成した『みやぎの先人集 未来への架け橋』(2013)は、東日本大震災の超克が、宮城県教育長高橋仁による巻頭言として期されており、大槻について、「本格的な国語辞書をつくる」というタイトルとともに、先人の一人として掲載されている¹⁵。同資料には、道徳授業での具体的な活用のための学習指導案集や、アナウンサー等による朗読版までが付随している。なお、この先人集には、これまで本稿で言及した、大槻盤溪、富田鉄之助の他、一力健治郎¹⁶についても、各一章として業績が述べられている。

一関市では、「大槻三賢人」の胸像が駅前に作られ、先述したように、大槻家に関する研究は一関市博物館の主要な展示内容ともなっている。一関市が作成した「マンガふるさとの偉人 大槻三賢人」はネット上でも公開されている¹⁷。大槻一関第一高校では、校訓の一つに「遂げずばやまじ」が掲げられている(同校ホームページ)。正門脇にはこの言葉が刻まれた碑もおかれ(阿曾沼2005,p74)、同校出身者によれば、現在も生徒たちの認知度が高いという¹⁸。

「遂げずばやまじ」の精神は、規範とされ、次世代継承への対象となっている。大槻が関係した当地においては、子どもたちへの教育の題材となるという外部性を持ち、社会的な信頼に値するものとなっていると言える。

おわりに

大槻を取り巻く SC に関わる価値を端的に示すものとして、「国利民福」がある。それは、大槻が宮城県仙台第一中学校創立30周年記念式典の講演において後進に示した期待でもあった。

「国利」の国とは皇国であり、これは戊辰戦争「敗者」から脱し、思想的正統への近接が志向されている。国のあるべき姿は大槻の重要関心事であり、大槻が19歳の時に書いた「正権論」では、政治には、国家を守る大道としての正道と、時勢を踏まえて変化を取り入れる権道があり、「正権並行」において、開国という権道に関しては、猾吏奸商(かつりかんしょう)の活動を抑え、交易により、水戦火攻の器械、器物書籍、船艦煩砲(こうほう=大型の火砲)等を得、国富みて、然る後、兵強し、と述べている(大島2007)。「民」については、対象者の捉えに幅がある。教育振興に貢献した木村が学んだ官立宮城師範学校や、大正デモクラシーを率いた吉野作造のような卒業生を輩出した宮城県尋常中学校(後に宮城県仙台第一中学校)で学ぶ「俊才」から、「教化」を必要とする者までが含まれる。

後者に関し、田中(2001)は、大槻の辞書編纂とは、「教育を受け国語を体得した『国民』にする」ことが根底にあったとする。大槻は、『広日本文典別記』(1897)の序論において、国語について、「一国の国語は、外に対しては、一民族たることを証し、内にしては、同胞一体なる公義感覚を團結せしむるものにて、すなわち、国語の一統は、独立たる基礎にして、独立たる標識なり。されば国語の消長は国の盛衰に関し、国語の純、駁(=純正でない)、正、訛は名教(=人が行うべき道)に関し、元氣に関し、国光に関す。豈に勉めて皇張(=主張)せざるべけんや(=しなければならない)」と述べている。安田は、大槻の『日本小史』が、神代から明治維新まで、外国との摩擦や接触により、日本文化が大きく「開化」した時期を四期に分けて論じていることに触れ、日本の「開化」が外から来るという認識について言及している。大槻はこの著について依田百川(えだひゃくせん,1834-1909)、西村茂樹にほめられたと「自伝」で述べ、自慢の作品であることを匂わせている。

国や文化、そして民においても上下、優劣があり、

上から下に対して「教化」や「開化」があるという認識は、同胞とされた日本のアジア植民地における日本語強要を是とした(田中2001)。

大槻の言う「国利民福」とは、「開化」に関わるような国々と対等に交易でき、搾取されない独立国家の国民であること、そして、「公義」を共有できる、組織的な教育を受けた人々として理解しうる。これらに関し大槻は、地誌・地図による領土認識の普及、辞書を介した国語・国語学の成立、教育者や国家有意の人材の育成ならびに普通教育への支持、に尽力したのであった。それらには、ナショナリズムとヒューマニズムが相俟っている。

大槻の仕事はまた、独立国のための基礎的要件の整備という喫緊の課題への対応であり、この課題解決の重要性を共有する人々たちの「私財であり公共財」としてのネットワークが複層的に形成されていった。それらの中での関係や資源は、次なる仕事の質を高めることに役立った。

国の存続という危機と一体であった社会転換期を乗り越えていくには、人々をつなぐ価値と社会的ネットワーク、さらには、それを体現し、百年以上を経ても通用する、質の高い、道具としての具体物が介在したとも理解できる。

大槻が目指した言文一致を含む国語学も発展を続け、「国語の一統」により「公義感覚を団結せしむる」ことは身近になっている。「国利民福」を「公利民福」へと拡張させつつ、大槻の時代と同じく、民に福をもたらすものの一つは教育である、と捉えるならば、それは、一世紀を超える時間的隔たりがあっても、社会転換期にある者たちをつなぐ規範になると考える。社会転換期の教員制度や教職員集団の在り方として、その時代の「民福」に「思ひさだめる」ことの重要性が示唆される。

大槻と富田に関する記録や先行研究からは、両名がともに、戦争の責任を負って処刑された家老、但木土佐の弔いにこだわったことがわかる。大槻は東京に、富田は但木の故郷に、但木の墓を建てることに手をつくした。両者とも但木を中心とする藩の決定による奨学をうけ、仙台を離れて学んだという教育歴をもつ。本稿では、この二人について、「敗者」から脱しようとする視点で捉えたが、奨学という組織的な期待への応答が高い動機づけの一部となり、立国に関わる活躍

を後押ししたとも推測できる。奨学を典型例としつつも様々な形態をとりうる社会的な期待は、次世代をつなぐSCを形成しうる。この点については稿を改めて検討したい。

引用・参考文献

- ダニエル・アルドリッチ / 石田祐他訳 (2015) 災害復興におけるソーシャル・キャピタルの役割とは何か、ミネルヴァ書房
- 阿曾沼要 (2005) 大槻三賢人, 高橋印刷
- 一関市博物館 (2011) 国語学者大槻文彦の足跡 ことばの海
- 宇野量介 (1973) 明治初年の宮城教育, 宝文堂
- 宇野量介 (1989) 大槻文彦 没後六十年に思う, 仙台一高卒業30年記念文集じっかい (抜刷), pp.135-157
- 大島英介 (2005) 大槻盤溪の世界 (岩手日日新聞全70回連載分 (2001年5月10日～2002年10月17日))
- 大島英介 (2007) 大槻文彦の「正権論」について—不攘の攘、不鎖の鎖—, 岩手県南史談会研究紀要, 36, pp.45-48
- 大槻文彦 (1897) 広日本文典別記 (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 大槻茂雄 (1928) 晩年の父, 国語と国文学, 東京帝国大学国文学研究室, 昭和3年7月号, pp.926-928
- 大槻文彦著, 大槻茂雄校訂 (1938) 復軒旅日記, 富山房
- 大槻文彦 (1935) 大言海, 富山房
- 後藤斉 (2019) 洋学者としての大槻文彦, ハイブリッドな文化, 東北大学出版会, pp.77-119
- 時事新報社 (1899) 福翁自伝 (Google, ブックス (最終閲覧日2024年1月10日))
- 仙台市教育会 (1938) 仙台先哲偉人録
- 関根正直 (1928) 大槻博士を憶ふ, 国語と国文学, 東京帝国大学国文学研究室, 昭和3年7月号, pp.944-948
- 高橋秀悦 (2014) 「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀總裁」富田鐵之助 へ戊辰・箱館戦争後まで, 東北東北学院大学経済学論集, 182, pp.93-124
- 田中恵 (1999) 大槻文彦の『言海』と地誌四著作 — 国家の輪郭形成をめぐる —, 年報日本史叢, pp.53-72
- 田中恵 (2001) 大槻文彦についての表記と国民, 日本史学集録, 24, pp.21-38
- 谷謙二 (2022) 今昔マップ on the web (<https://ktgis.net/kjmapw/index.html>) (最終閲覧日2024年12月1日)
- 東京帝国大学国文学研究室 (1928) 国語と国文学, 昭和3年7月号, 至文堂, に pp.897-956
- 戸沢行夫 (1985) 知識人集団としての明六社: 森有禮と福澤諭吉の視点から, 近代日本研究, 2, 慶應義塾福澤研究センター, pp.291-325
- ロバート・D・パットナム (2019) 孤独なボウリング, 柏書房 (Putnam, R.D., (2000) *Bowling Alone*, Simon & Schuster)
- 本図愛実 (2023) 仙台市教育研究所に連なる教師たちのソーシャル・キャピタル—宮城県師範学校附属小学校を媒介とする社会的ネットワーク, 宮城教育大学教職大学院紀要, 4, pp.29-41
- 本庄栄治郎 (1968) 洋々社について, 日本学士院紀要, 27, 1, pp.11-18
- 水原克敏 (1980) 明治前期教育行政に果たした師範学校の役割—小学校教員の職能成長への役割—, 岩下新太郎編, 明治啓蒙期における地方教育指導行政—宮城・福島両県の場合を中心として—, pp.28-58

宮城県教育委員会 (1976) 宮城県教育百年史.1, ぎょうせい
 安田敏朗 (2018) 大槻文彦『言海』辞書と日本の近代, 慶應義塾出版会
 山口昌男 (1995) 「敗者」の精神史. 岩波書店
 山田俊雄 (1980) 図録 日本辞書言海, 大修館書店

註

- 1 本稿本文の年号表記について、明治、大正、昭和時代は和暦と西暦を併記し、平成、令和時代は西暦のみとする。
- 2 『言海縮刷』の裏書には初版の印刷発行は1889（明治22）年5月15日とある。印刷事情等から実際の発行はこの日程より遅れ、その事情が奥書に書かれている。奥書の日付は明治24年4月。なお、完成原稿は1886（明治19）年3月に文部省に提出され、1888（明治21）年10月に私費出版を条件に下賜された。
- 3 武藤泰史による新書版の解説によれば（pp.1270-1271）、「大形」、「中形」、「言海縮刷」（「小形」）があり、初版は大型4分冊として1889（明治22）年～1891（明治24）年にかけて作成され、その後すぐに一冊本となり、1904（明治37）年に「小形」、1909（明治42）年に「中形」が刊行された。
- 4 本論文では、漢字かな交じり文や旧字体で著されている文章等の引用については、できる限り現代的使用に変更して示す。
- 5 明治22年1月初版の広告では一冊6円。『言海縮刷』の奥付には昭和6年の628版の定価として1円80銭と記されている。MUFJのホームページでは明治34年の1円は企業物価指数から現在の1490円の価値があるとされる。他のモノの価値でみると、4760円、20000円との見方も示されている。（<https://magazine.tr.mufg.jp/90326>）（最終閲覧日2024年9月30日）
- 6 『一関市博物館研究報告』では小岩弘明が1998年の創刊号よりほぼ毎年、文彦、文彦の父盤溪、祖父玄沢の三代についての論考を発表している。
- 7 別名として盤水。
- 8 表記は昭和10年出版の『大言海』に集録されたものから。
- 9 アムプロワズ・ランジュ・フィース著、土屋政朝訳（1883）『刪訂教育学』
- 10 この頃、1897（明治30）年1月に出版となった『廣日本文典』作成に注力しており、同書により1899（明治32）年文学博士の学位が授与された。
- 11 木彫を基にブロンズ像が作られ、現在は、宮城県仙台第一高等学校（宮城県尋常中学校はその前身）の図書館前に置かれている。今日も生徒たちが賽銭や合格願掛けをするなど一高生らしい敬意の対象になっている。
- 12 大槻が校長を務めた宮城県尋常中学校は、1904年より宮城県立仙台第一中学校、1948年より宮城県仙台第一高等学校となった。
- 13 「くわい」とは会の意。当時の発音として多く聞かれた「くわい」を仮名で表記している（関根正直1928,p946）。口語法（言文一致）に関わる大槻の問題意識を示している。
- 14 渋谷は、同書の序に「我が国運は悠久二千六百年の歴史」を有するとともに、先賢の遺緒（いちょ＝遺業）に負う所が大きいとし、「この時（筆者註：日中戦争）にあたり、仙台市教育会は、先哲偉人録を編纂してこれを広く世にわかつたんとする。いやしくも先賢の遺徳遺業を景慕し、仰いで自警（じべつ＝自戒）の規範を求むるものの執つて以

て指導強化の資料となすことを得ば、甚だ幸甚とするところである」と記している。調査委員として9名の名が記載されており、石川謙吾、宇津志健雄など、宮城県師範学校関係者の名がある。石川、宇津志については本図（2023）を参照。

- 15 宮城県「みやぎ先人集未来への架け橋」（<https://www.pref.miyagi.jp/documents/1289/216356.pdf>）（最終閲覧日2024年12月1日）
- 16 木村敏の石碑建立者の一人であった一力健次郎の弟。河北新報創設者。
- 17 一関市「マンガふるさとの偉人 大槻三賢人」（<https://www.bgf.or.jp/bgmanga/304/>）（最終閲覧日2024年12月1日）
- 18 2020年度卒業、2024年宮城教育大学4年生となっている学生1名からの聞き取り（2024年11月26日）。